

令和 6 年 6 月 4 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00431

研究課題名（和文）『カンタベリー物語』Hg, E1写本及び刊本の話法意味論コーパスの構築

研究課題名（英文）A Construction of the Semantic Corpus of Speech and Thought Representaion of the MSs of Hg/E1 and the Editions of the Canterbury Tales

研究代表者

中尾 佳行 (Nakao, Yoshiyuki)

広島大学・人間社会科学研究科（教）・名誉教授

研究者番号：10136153

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,900,000円

研究成果の概要（和文）：チョーサーの『カンタベリー物語』のHg, E1写本及び刊本、Blake (1980)、Benson (1987)を基に、話法の意味論的コーパスの構築を行った。計量的に調査できるタグと計量的には容易に調査できない、つまり質的な分析を要するタグを設定した。前者は直接話法を導入する発話動詞とその動詞が伴う修飾構造、発話動詞の時制、発話動詞の統語位置、直接話法・被伝達部の構造（呼びかけ、命令文、感嘆文、省略文）等。後者は、特に語り部において、意味論的に主体が拡散していく可能性（語り手、人物、聴衆・読者）。写本と刊本の異同の調査において、差異が語り部の時制とモダリティに頻出することが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

英文学史において話法は語りにおいて書き手の事態再生の根源的問題であるが、歴史的な観点に立った考察はFludernik, Fleischman, Moore等に先駆的な研究があるものの、未だ不十分である。チョーサーにおいても例外ではない。写本の異同も捉えた研究は更に不十分である。本研究は、最も古い写本、Hgとその刊本Blake (1980)とE1とそれを基盤にした刊本Benson (1987)の電子データに基づき話法の意味論コーパスを構築した。タグ付けは量的に可能なものと質的な解釈を要するものに二分された。本研究はチョーサー及び中英語文学の話法研究をデジタル化とその分析において一層発展させた。

研究成果の概要（英文）：We attempted to construct the Semantic Corpus of Speech and Thought Representation of the earliest manuscripts of Hg and E1 and the editions, Blake (1980) and Benson (1987) of the Canterbury Tales. Our investigations are in two ways, quantitative and qualitative. The former quantitative focused on verbs of speaking to introduce direct/indirect speech, modifying structures of those verbs, their tense (past/present), their syntactic positions, structural features of speeches (address, interjection, imperative, interrogative, exclamatory sentences, ellipses). The latter qualitative focused on narrative parts (tense, modality) and pointed out the diffusion of textual subjectivities. The similarities and dissimilarities between the manuscripts Hg, E1 and the editions, Blake and Benson were investigated. The dissimilarities were most frequently observed particularly in narrative parts with regard to tense and modality.

研究分野：チョーサーの言語及び文学の研究

キーワード：チョーサーの話法 意味論コーパスの構築 カンタベリー 物語 Hengwrt MS Ellesmere MS 初期刊本 スピーチの言語指標 語り手の編集

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

話法の研究は、近代の小説が中心に行われ、その発達過程の調査は少ない。中世の韻文作品は殆ど扱われず、特に意味論では、Fludernik (1993, 1996)や Moore (2011)により部分的な検証がある程度で、チャオサーでのその体系立てた調査は殆どなされていない。話法の設定の切り替えは、多くの場合その言語の意味を変容させ、話法は本質的に意味論の問題である。本研究では、話法を意味付けるタグを精緻化し、そのタグを多様な社会層の巡礼者が話をし、話法の多様性が見られる『カンタベリー物語』、これまでの研究で作成した電子化された4テキスト、Hg, El 写本及び刊本に付加し、話法の意味論コーパスを構築する。

2. 研究の目的

中世英国詩人チャオサー (Geoffrey Chaucer, 1343?-1400) の話法は、彼の言語の意味がどのようにまた何故生み出されていくかを捉える重要かつ有効な手段になると考え、本研究において次の3点を中心に研究を行う。

(1) チャオサーの話法情報を分類し意味付ける指標、タグは、これまでの研究では体系性に欠けており、本研究ではこのタグを語りのマクロ構造 (ジャンル、対人関係、談話構造、話法タイプ等) からミクロ構造 (スピーチの言語指標) まで精緻化し、話法研究を発展させていく。

(2) (1)のタグをこれまでに作成した『カンタベリー物語』の電子化された4つのパラレルテキスト、Hengwrt (以下、Hg), Ellesmere (以下、El) 写本及び刊本 (Blake (1980), Benson (1987)) に付加し、話法の意味論コーパスを構築する。(なお比較のために他写本及び初期刊本 (Caxton, Wynnkin de Worde, Pynson, Thynne) の情報も活用する。)

(3) (2)の写本及び刊本のそれぞれにおいてまた両者を跨って、話法に付加されたタグはどの程度類似し、相違しているかを統計的に解析し、話法の編集過程を明らかにする。

3. 研究の方法

(1) チャオサーの話法の意味付けに寄与すると考えられるタグを語りのマクロ構造からミクロ構造まで精緻化する。

(2) 話法の種類は、Leech and Short (1981)を基にした Fleischman (1990)、そして Fludernik (1993)を理論的基盤とした。人物がコントロールしているか、語り手がコントロールしているかで、段階的に規定される。自由間接話法・思考も調査対象とする。

(3) タグを作成済みの電子化された4つのテキスト、Hg, El写本及び刊本のパラレルテキストに付加する。

(4) 写本及び刊本のそれぞれにおいてまた両者を跨って、話法のタグ付け情報がどの程度類似し、どの程度違っているのかを量的及び質的に調査する。

4. 研究成果

話法の意味論を規定するタグが容易に特定され、一義的に付加できる場合に対し、一つのテキストに対して複合的にタグを付加しないと見えない場合が、当初予定していた以上に存在することが分かった。前者は計量化が可能で、次のものがある。話法を構成する伝達動詞の種類、伝達動詞の生起位置 (initial, medial, final)、伝達動詞に付加された修飾構造、直接話法・被伝達部の言語特徴 (呼びかけ、間投詞、命令文、疑問文、感嘆文、直示語、省略文、二人称代名詞、法助動詞、方言使用)、被伝達部の長さ (語数) 等。後者は、計量化は難しく質的な分析が要請されるもので、特に話法における視点の (複層) 構造が問題になった。本研究において、チャオサーの話法の本質的特徴は、前者ではなく、この後者の複雑性にあることが明らかにされた。

前者においては、Hg, El 写本及び刊本 Blake (1980), Benson (1987)、更には初期刊本において、異同が観察された。例えば、話法の被伝達部において、スピーチの精緻化の度合い、換言すれば、語り部との差異化の程度が、同じく被伝達部において法助動詞の現在形と仮定法過去の異同が見られた。逆に語り部においては、スピーチではまれである時制 (直説法過去と現在形) の異同が見られた。それぞれを例証しよう。

[dialect in speech]

323 HG: This lang⁷ nyght⁷ # ther tydes me na reste
 EL: This lange nyght / ther tydes me na reste
 BL: This lang nyght ther tydes me na reste,
 BN: This lange nyght ther tydes me na reste;
 X1: Thys longe nyght ther tyd me no reste
 X2: This longe nyght ther tyd vs no reste
 PY: This long nyght ther tyd me no rest
 WY: This longe nyght ther tyd vs no reste
 TH: Al this lange nyght tydes me no reste

S1: All this lang night tides me no rest
 S2: All this lang night there tides me no rest:
 S3: All this lang night there tides me no rest:

注：HG=Hengwrt MS, EL=Ellesmere MS, BL=Blake (1980), BN=Benson (1987), X1=Caxton's first edn (c 1476), X2=Caxton's second edn (c 1482), PY=Pynson (1492), Wy=Wynkyn de Worde (1498), TH=Thynne (1532), S1=Speght's first edn (1598), S2=Speght's second edn (1602), S3=Speght's third edn (1687) (地村彰之代表科研：21K003800A、大野英志代表科研：22K00604、中尾佳行代表科研：20K00431 参照。)

HG は lang で final -e を削除、話者の北部方言を反映しているが、EL は母音[a]は北部方言を反映するが、final -e を付し、チョーサーの通常用法に合わせている。Blake (1980)はHG を忠実に再生するが、Benson (1987)はEL を採用している。初期刊本においても異同が見られるが、上記引用において最も新しい Speght は3版ともHG の lang を採用しているのは、注目に値する。

[modals in speech]

HG:034r KT 1684 He wole / his firste purpos modifie #
 EL:027v KT 1684 wolde modifye
 BL:KnT 2544 # .
 BN:Knt 2542 wol # modifye .

注：KT=The Knight's Tale

HG を起点に、HG と違った箇所のみ形式を示している。#は存在しないことを示す。

HG:086r SU 0541 How that this fart⁷ sholde euene ydeled # be
 EL:087r SU 0541 # delt shal
 BL:SumT 2223 fart
 BN:SU 2249 fart evene deled

SU=The Summoner's Tale

法助動詞の現在形か假定法過去の異同は文脈的にはいずれも問題ないが、意味論的には違いがあり、後者は心理的な距離（遠慮がち）が看取される。

[tense in narrative parts]

HG:026v KT 1107 And blynd he was / as it is ofte seen #
 EL:021v KT 1107 was often seene
 BL:KnT 1967 , seene .
 BN:Knt 1965 , often seene ;

HG:044v MI 0188 He kembed his lokkes brode / and made hym gay #
 EL:036v MI 0188 kembeth hise
 BL:MilT 3368 # .
 BN:MI 3374 kembeth , ;

注：MI=The Miller's Tale

KT の例では、HG はメタ言語として現在形を採用、他方 EL は過去の語りの一環として過去形を採用している。ここでは Benson は、HG の現在形を採用している。MI では、HG は過去形 (kembed, made) で一致させているが、EL は、最初の動詞を kembeth と現在形にしている。EL はプロセス（現在形）と結果（過去形）を意図したのかもしれない。（写本と刊本における時制とモダリティの異同は、2023年8月7日、広島大学で開催の国際学会 The 2023 Hiroshima International Conference: *In sondry ages and sondry londes: Global Chaucer in the XXIst Century* において“Scribal and Editorial Variations in Chaucer's Speech and Thought Representation with Special Reference to Tense and Modality” と題して発表した。）

後者の質的な場合は、話法の話し手 (addresser) と聞き手 (addressee) のコミュニケーションの多層性が問題となる。直接話法と語り部の境界線が低く、語り手が述べているのか、登場人物が話しているのか、テキストは柔軟に複数の主体に開かれていく。Moore (2011)はこの問題の萌芽的な研究であるが、本研究では更に追究、発展させた。写本・刊本に異同が見られず、タグ付けは質的な判断になった。一つの発話行為文に対する複合的タグの可能性と語り部における現在時制文が許す主体の層の問題を例示しよう。

次の用例は「トパス卿の話」において、トパス卿が巨人オリファンと卿と戦うべくその意気込みを語ったところである。

His sheeld was al of gold so reed,
 And therinne was a bores heed,
 A charboacle bisyde;
And there he swoor on ale and breed (下線は筆者)
How that the geaunt shal be deed,
Bityde what bityde! VII 869-74 (Benson 1987)

Bytyde what bytyde は、誰が誰に話すかによって、新たなストーリーラインが生み出される。ここでは誰にとっての真実か、真実性の問題が原理的に問われているように思える。

現代編者の異同、句読点の異同に認知主体を広げて見てみよう。語りは書き直され、読み直されていく。編者も読み手・書き手の認知主体である。Skeat は、次のように、‘the geaunt’以降、直接話法と見立てている。

And there he swoor, on ale and breed,
 How that ‘the geaunt shal be deed,
 Bityde what bityde!’ VII 872-74 (Skeat 1900)

Pollard は、次のように、Bityde の譲歩文をシングル・クォーテーションでマークし、直接話法の扱いである。コンマで bityde に繋がっており、swoor を受けたトパス卿のスピーチと解せる。

And there he swoor, on Ale and breed,
 How that the geaunt shal be deed,
 ‘Bityde what bityde!’ VII 872-74 (Pollard 1898)

しかし Donaldson は、次のように、shal be deed と Bitide の間にダッシュを入れて、微妙な主体の切り替えをほのめかしている。

And there he swoor on ale and breed
 How that the geaunt shal be deed—
 Bitide what betide. VII 872-74 (Donaldson 1958, 1975)

このように編者は、句読点を通して誰が言ったかという主体の問題に関わっていく。この点、写本は主体の曖昧性を潜在的に潜めている。

語り部における現在時制文は「総序」の托鉢修道僧の紹介に現れている。貧乏教団に寄進するのは悔悛している証拠、また人は心頑ななので、いくらつらくとも泣くことはできない（だから銀貨を寄進すべき）、貧乏人とつきあうのは名誉にならない、ためにもならないと述べる。

- 229 HG: For vn to a poure ordre / for to yeue
 EL: For vn to a poure ordre / for to yiue
 BL: For vnto a poure ordre for to yeue
 BN: For unto a povre ordre for to yive
 X1: Vnto a poure ordre forto yeue
 X2: For vnto a poure ordre forto gyue
 PY: For vnto a poure ordure for to gyue
 WY: For vnto a poore ordre for to geue
 TH: For vnto a peore ordre forto gyue
 S1: For vnto a poore order for to giue
 S2: For vnto a poore order for to giue.
 S3: For vnto a poore order for to giue,
 230 HG: Is signe / that a man / is wel yshryue
 EL: Is signe / þ^t a man # is wel yshryue
 BL: Is signe that a man is wel yshryue.
 BN: Is signe that a man is wel yshryve;
 X1: Whan that a man is wel I shryue
 X2: Is signe that a man is wel I shryue
 PY: Is signe that a man is wele y shryue
 WY: Is sygne that a man is well y shryue
 TH: Is sygne that a man is wel yshryue
 S1: Is signe that a man is well yshriue:
 S2: Is signe that a man is well yshriue:
 S3: Is a signe that a man is well ishriue;

- 233 HG: For many a man / so hard is of his herte

- EL: For many a man / so hard is of his herte
 BL: For many a man so hard is of his herte
 BN: For many a man so hard is of his herte,
 X1: Many a man so hard is of herte
 X2: Many a man so hard is of herte
 PY: Many a man so hard is of herte
 WY: Many a man so harde is of herte
 TH: For many a man is so hard of herte
 S1: For many a man is so hard of hert
 S2: For many a man is so hard of hert,
 S3: For many a man is so hard of herte,
- 234 HG: He may nat weepe / # thogh þ^t he soore smerte
 EL: He may nat wepe / al thogh # hym soore smerte
 BL: He may nat weepe thogh that he soore smerte.
 BN: He may nat wepe, althogh hym soore smerte.
 X1: He may not wepe though he sore smerte
 X2: He may not wepe thought he sore smerte
 PY: He may nat wepe though he sore smerte
 WY: He may not wepe though he sore smerte
 TH: That he may not wepe though hym smerte
 S1: That he may not weepe although him smert:
 S2: That he may not weepe although him smert.
 S3: That he may not wepe although him smerte.
- 250 HG: It is nat honeste / it may noght auau^{ce}
 EL: It is nat honeste / it may nat auau^{ce}
 BL: It is nat honeste, it may noght auau^{ce}
 BN: It is nat honest; it may nat auau^{ce},
 X1: It is not honest it may not a vaunce
 X2: It is not honest it may not auau^{ce}
 PY: It is nat honest it may nat auau^{ce}
 WY: It is not honest it may not auau^{ce}
 TH: It is not honest / it maye not auau^{ce}
 S1: It is not honest, it may not auau^{ce}
 S2: It is not honest, it may not auau^{ce},
 S3: It is not honest, it may not auau^{ce}
- 251 HG: For to deelen / with no swich poraille
 EL: For to deelen / with no swich poraille
 BL: For to deelen with no swich poraille,
 BN: For to deelen with no swich poraille,
 X1: Forto dele with suche poraille
 X2: Forto dele wyth suche poraylle
 PY: For to dele with suche poraille
 WY: For to dele wyth suche poraylle
 TH: For to dele with suche porayle
 S1: For to dele with no such poraile
 S2: For to deale with such poraile,
 S3: For to dele with such porayle,

HG, EL, Blake (1980), Benson (1987)そして初期刊本も異同なく、現在形である、托鉢修道僧が話しているのか、語り手が托鉢修道僧の思考に同調、一般化しているのか。語り手と言っても限界点のある巡礼者語り手なのか、それとも物語を俯瞰する解放地点の語り手なのか、更なる主体、読者の反応はどうなのか。

話法が本質的には意味論であることは、国内外的に見て十分に認識されていない。本研究で作成する意味論コーパスは、話法の研究に新たな地平を切り開くものと期待される。

引用文献

- Fleischman, S. 1990. *Tense and Narrativity: From Medieval Performance to Modern Fiction*. Austin: University Texas Press.
 Fludernik, M. 1993. *The Fictions of Language and the Languages of Fiction: The linguistic representation of speech and consciousness*. London and New York: Routledge.
 Leech, G. and M. Short. 1981. *Style in Fiction*. London: Longman.
 Moore, C. 2011. *Quoting Speech in Early English*. Cambridge: Cambridge University Press.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計12件（うち査読付論文 10件 / うち国際共著 2件 / うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 Ohno, Hideshi	4. 巻 39
2. 論文標題 Variations in the Use of listen among the Earliest Manuscript and Printed Editions of The Canterbury Tales	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Studies in Modern English	6. 最初と最後の頁 23-38
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Jimura, Akiyuki	4. 巻 38
2. 論文標題 「日本における『カンタベリー物語』と池上忠弘監訳『カンタベリー物語』共同新訳版（悠書館、2021）について」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 SIMELL	6. 最初と最後の頁 13-29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤健一	4. 巻 52(2)
2. 論文標題 ガウスカーネルを共変量に用いた非負値行列因子分解について	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 応用統計学	6. 最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.5023/jappstat.52.59	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西原貴之・中尾佳行.	4. 巻 3
2. 論文標題 「チャーターの語りのテキストにおける 時制の交替移行について 現象と認知主体の近さに着目して」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 広島大学大学院人間社会科学研究科紀要「教育学研究」	6. 最初と最後の頁 120-128
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤健一	4. 巻 51(2)
2. 論文標題 経時測定データに対する非負値行列因子分解によるソフトクラスタリングについて,	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 応用統計学	6. 最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.5023/jappstat.51.1	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Ohno, Hideshi	4. 巻 66
2. 論文標題 The Use of ouen in Fifteenth-Century Printed Editions of The Canterbury Tales	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Hiroshima Studies in English Language and Literature	6. 最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Jimura, Akiyuki	4. 巻 -
2. 論文標題 A New Approach to the Manuscripts and Editions of The Canterbury Tales: With Special Reference to Thynne's Edition	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 チョーサー研究会/狩野晃一編 『中世英文学の日々に 池上忠弘先生追悼論文集 』英宝社	6. 最初と最後の頁 183-203
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中尾佳行	4. 巻 7
2. 論文標題 「チョーサーの話法の伝達動詞を考える 『トロイラスとクリセイデ』の場合」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『大学教育論叢』第7号、福山大学大学教育センター	6. 最初と最後の頁 119-138
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Yoshiyuki Nakao	4. 巻 -
2. 論文標題 Chapter IX. Chaucer's Speech and Thought Representation in Troilus and Criseyde: Encoded Subjectivities and Semantic Extension	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Polyphony and the Modern	6. 最初と最後の頁 169-91
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 地村彰之	4. 巻 56
2. 論文標題 The House of Fameと「商人の話」における五感の表現 真実と嘘をめぐって	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『岡山理科大学紀要』	6. 最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Hideshi Ohno	4. 巻 39 (2)
2. 論文標題 A Synchronic Analysis of Transition from the Impersonal to Personal Construction	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 eJGN (John Gower Newsletter)	6. 最初と最後の頁 38
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 佐藤健一	4. 巻 49 (2)
2. 論文標題 時空間データに対するバランス型成長曲線モデルの適用, 応用統計学	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 応用統計学	6. 最初と最後の頁 71-84
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.5023/jappstat.49.71	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計11件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 5件）

1. 発表者名 中尾佳行
2. 発表標題 G. Chaucer が近・現代英語に遺したもの 英語の詩的資源の発見とその最大限の活用
3. 学会等名 近代英語協会、第 40 回大会、関西外国語大学（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Nakao, Yoshiyuki
2. 発表標題 Scribal and Editorial Variations in Chaucer's Speech and Thought Representation with Special Reference to Tense and Modality
3. 学会等名 The 2023 Hiroshima International Conference: In sondry ages and sondry londes: Global Chaucer in the XXIst Century (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Jimura, Akiyuki , Hideshi Ohno, Yoshiyuki Nakao and Kenichi Satoh
2. 発表標題 A New Approach to the Manuscripts and Editions of The Canterbury Tales: With Special Reference to Speght's Editions
3. 学会等名 The 2023 Hiroshima International Conference: In sondry ages and sondry londes: Global Chaucer in the XXIst Century (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Ohno, Hideshi
2. 発表標題 Variation of Impersonal Constructions in Early Editions of the Canterbury Tales
3. 学会等名 The 2023 Hiroshima International Conference: In sondry ages and sondry londes: Global Chaucer in the XXIst Century (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 中尾佳行、池上恵子、杉藤久志、石野はるみ（司会：狩野晃一）
2. 発表標題 シンポジウム「『カンタベリ物語』を翻訳すること 翻訳・編集・出版過程を振り返る」
3. 学会等名 日本中世英語英文学会東支部 第38回 研究発表会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Nakao, Yoshiyuki
2. 発表標題 "How to Translate Chaucer's Multiple Subjectivities into Japanese: Ambiguities in His Speech Representation" (online paper)
3. 学会等名 The 22nd Congress of the New Chaucer Society at Durham (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Ohno, Hideshi
2. 発表標題 "An attempt to identify textual ghosts of the 15th-century Canterbury Tales editions: With special reference to impersonal verbs" (online paper)
3. 学会等名 The 22nd Congress of the New Chaucer Society at Durham (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 中尾佳行
2. 発表標題 チヨースーの話法と「主体」の演出 childe（「トパス卿の話」VII 806）を中心に
3. 学会等名 日本英文学会第93回全国大会（オンライン開催）（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 中尾佳行
2. 発表標題 シンポジウム題目：『話法の歴史的発達』「チョーサーの話法における「安定」と「不安定」
3. 学会等名 日本英文学会中国四国支部第73回大会（オンライン開催）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 中尾佳行
2. 発表標題 チョーサーのnarrative tenseを考える Fleischman (1990)の機能論から見直す
3. 学会等名 日本中世英語英文学会第37回大会（オンライン開催）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 地村彰之・笹本長敬
2. 発表標題 ジェフリー・チョーサー作『善女列伝・短詩集』の翻訳にあたって
3. 学会等名 日本中世英語英文学会西支部第37回例会（オンライン開催）
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 Nakao, Yoshiyuki	4. 発行年 2024年
2. 出版社 Peter Lang	5. 総ページ数 -
3. 書名 "02 The Structure of Chaucer's Speech and Thought Representation: Defining and Diffusing of Subjectivities with Special Reference to Troilus and Criseyde". Linguistic and Stylistic Approaches to Speech, Thought and Writing in English: Diachronic and Synchronic [MEA Studies in English Philology and Linguistics 1]	

1. 著者名 笹本長敬・地村彰之訳	4. 発行年 2023年
2. 出版社 溪水社	5. 総ページ数 80
3. 書名 ジェフリー・チョーサー作 アストロラーベに関する論文	

1. 著者名 中尾佳行・池上忠弘	4. 発行年 2022年
2. 出版社 悠書館	5. 総ページ数 1033
3. 書名 「2. 『カンタベリ物語』の写本と初期刊本」池上忠弘企画・狩野晃一編：『チョーサー巡礼 古典の遺産と中世の新しい息吹に導かれて』(51-91)	

1. 著者名 中尾佳行	4. 発行年 2021年
2. 出版社 悠書館	5. 総ページ数 1033
3. 書名 池上忠弘監訳。共同新訳版。ジェフリー・チョーサー著『カンタベリ物語』（「托鉢修道士の話」（pp. 317-18）、「教会裁判所召喚吏の話」（pp. 339-72）の翻訳	

1. 著者名 地村彰之・笹本長敬	4. 発行年 2020年
2. 出版社 溪水社	5. 総ページ数 267
3. 書名 ジェフリー・チョーサー作『善女列伝・短詩集』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	地村 彰之 (Akiyuki Jimura) (00131409)	広島大学・人間社会科学研究科(文)・名誉教授 (15401)	
研究分担者	佐藤 健一 (Satoh Kenichi) (30284219)	滋賀大学・データサイエンス学系・教授 (14201)	
研究分担者	大野 英志 (Ohuno Hideshi) (80299271)	広島大学・人間社会科学研究科(文)・教授 (15401)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関